The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

satkāyadṛṣṭi 再考

水　野　和　彦

1．はじめに　satkāyadṛṣṭi は，無我を説く仏教においては間違った見解とされており，重要な煩悩法の一つである．その概念については，古くは *Suttanipāta* において，そのパーリの対応語 sakkāyaditṭhi という語句を見出すことができる[1]．また他の阿含・ニカーヤにおいても，三結・五順下分結などの煩悩として見られ，このことから，仏教の早い時期からその概念は成立したと考えられる．そしてアビダルマにおいては，見随眠の一つとして緻密な煩悩体系の中で，聖道，禅定論等とともに議論されるようになる．その概念規定については，簡潔に説明されている『法蘊足論』（玄奘訳）から引用すると「云何有身見．謂於五取蘊．起我我所想．由此生忍楽慧観見．名有身見．」（T26. 497a16–18）とある．satkāyadṛṣṭi とは，身（kāya）については，“五蘊の集り”と解釈して，その五蘊において我（ātman）や，あるいは我所（ātmīya）の想をもつ見解のことである．

しかしその語義解釈については，非常に問題が多いといわれてきた[2]．その先行研究から，特に sat の語義解釈に関して主に二つの議論が提示できる．一つは，パーリ原語 sakkāyaditṭhi から梵語に訳される時に，satkāyadṛṣṭi ではなく，古くは svakāyadṛṣṭi という語形であり，それが，説一切有部の教学とともに satkāyadṛṣṭi と解釈されるようになったという議論である．この研究については，今西［1986］の論文において詳しく論述されているが，その中において，欧州を中心とした研究者らの経緯がまとめられていて，多くの検討資料が提示されている．

そしてもう一つの議論が，『倶舎論』や『順正理論』などにみられる sat についての語義解釈である．それは，薩（sat）を「有」（sati）と解釈する説一切有部の説，もう一つは「壊」（sīdati）と世親に仮託される経量部の説の対比である．本稿ではこの satkāyadṛṣṭi を再考するにあたって，後者の議論に着目して，それぞれの語義解釈の考察によって，部派の思想の独自性を明らかにしたい．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．sat についての二通りの解釈

2．1．世親の sat 語義解釈　有部と世親（経量部）との，sat の語義解釈の明確な違いが示されるのは『倶舎論』になってからである．ここで，その記述がある対応箇所について，① *Abhidharmakośabhāṣya*[3]，②真諦訳『阿毘達磨倶舎釈論』，③玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』と，順に各々検討する．

① ***Abhidharmakośabhāṣya*（*AKBh*）**

> 我見あるいは我所見が有身見である．**sat とは壊れる（sīdati）である**．そして身（kāya）とは集合のことで，その積集，蘊（skandha）という意味である．これは sad（＝壊れるもの）であり，集まりである，ということで薩伽耶（satkāyaḥ）であり，五取蘊のことである．常住の想と（単一の）塊であるという想を排除するために，このように明示するのである．このように，それら（五取蘊）において我と執着することを前提としているのである．（*AKBh*. p. 281）

世親は，sat を sīdati と解釈する．この sīdati の語根は，√sad であり，「壊れる」という意味である．そして *AKBh* 以前の論書においては，sat の語義解釈を説明する記述が見当たらないことから，この箇所でその意味について初めて言及した可能性が高い．ただ世親のこの解釈は，sat の語義解釈の違いに注目するだけであって，「常住の想，塊である想を排除する」とあるように，五蘊の集まりに我・我所の常住性を否定している点は，有部の思想から逸脱するものではない．あくまでも語句の意味の捉え方の違いである．

② **『阿毘達磨倶舎釈論』**　『倶舎釈論』（真諦訳，546 年訳）においては，satkāyadṛṣṭi の訳に「身見」という語句を用いている．これについては，この後引用する玄奘訳で「有身見」と訳されるまで，ほとんどの旧訳の経典論書において，「身見」と訳されている[4]．だから真諦も前例に倣って使用したと考えられる．しかしこの語句では，sat の語義がわからない．そこで sat の語義説明をしている，この箇所（T29. 253c–254a）の記述を見てみると，真諦は，刹那ごとに壊れることを「滅」と説き（T29. 253c26），身見の説明について滅身見（T29. 254a3）と表現し，sat の意味を「壊」という解釈で補足している．ただ，ここでもう一つ付け加えれば，玄奘訳で見られるような「有」という解釈の記述がないことも，この時代の中国における有部の思想理解を考慮する上で重要な検討資料である．

③ **『阿毘達磨倶舎論』**　『倶舎論』（玄奘訳，651 年訳）では，まず先に sat を「壊」と解釈する世親の立場を説き（T29. 100a1），続いて「毘婆沙者」（T29. 100a4）以下において，sat を「有」と解釈する有部について言及している．これらを対比させていることから，世親が有部とは異なった立場であることが明確に示されてい

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る．このsatkāyadṛṣṭiについて「有身見」という訳語は，玄奘訳の有部論書に広く見出される[5]．ただ玄奘訳の論書では，その箇所の議論において，薩迦耶見という音写語，あるいは身見という訳も見られることから，「有」という解釈に固定しているわけではない．

2．2．『順正理論』による有部の反論　『倶舎論』で明らかになった世親の解釈は，『順正理論』（衆賢著，玄奘訳，654年訳）の中では「経主」（経量部）の主張として記述され，その後衆賢の反論が続く（T29. 606a3）．衆賢は，satkāyaの迦耶（kāya, 集まり）は，五蘊の和合のことであり，単一の存在であることを誤認しないための無常性をも含む語義であるとする．そしてその語句の上に，sat「壊」という語義を加えるなら，意味が重複するから，その経主（世親）の解釈を否定する．

それに対して有部はsatを「有」と解釈する（T29. 605c20）．その根拠については，『婆沙論』（T27. 36a21–25）と『順正理論』（T29. 605c22–23）にも記述されているが，有部の基本命題として法の実有性を端的に指摘する田端［1977］の記述を引用すると，「所縁なくして「見（dṛṣṭi）」を起こすことは不可能であり，それ故に「見」を境において立てるためには，「有（sat）」でなくてはならぬものが在って然るべきである．」[6]とある．

3．『成実論』に見られる身見の記述　それでは，それに対して世親はなぜ「壊」という解釈をしたのか．『順正理論』では世親の説を経量部と言い換えているが，sīdatiという解釈が，世親による恣意的なものでない根拠について考察してみたい．

そこで経量部の思想と推定される訶利跋摩作『成実論』（鳩摩羅什訳，411年）「身見品」を見てみると，非常に興味深い記述がみられる．ここでは真諦訳と同様，「身見」という訳語を使用しているが，訳年を見れば然るべきである．また，その概念規定は「五陰中我心名為身見．実無我故説縁五陰．五陰名身．於中生見名為身見．於無我中而取我相．故名為見．」（T32. 315c24–26）とあり，ほぼ有部の論書と同じである．

しかしその同じく「身見品」の中で，次のような記述がある．「以空相滅五陰相．滅五陰相名第一義諦．又若説世諦故有．」（T32. 316c25–26）と，五蘊の相の滅を説く．これは，世親の『倶舎論』におけるsatの解釈「壊」の思想的な根拠として考えられる．さらに先ほどの記述に加え，「経中説．眼等以第一義諦故無．世諦故有．」（T32. 316c28–29）と続くように，二諦説を以て有とも無とも断定を避けていることは，有部のsatを「有」と解釈することへの反論になり得る箇所で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

はないか．ただ世親の『倶舎論』では，この sat を「壊」と解釈する議論において，二諦説や空相を観ずる，というような記述は見られない．それは，『成実論』において見られるような，第一義諦や空の思想などの経量部の教義を，この satkāyadṛṣṭi の議論の中であからさまに主張するのではなく，あくまでも sat を sīdati と解釈することによって，暗に有部を批判した上に，経量部の説を提示しているのではないかと考えられる．

結語　satkāyadṛṣṭi を再考する中で，その語義解釈に注目し『倶舎論』『順正理論』を中心に比較検討した．そして『成実論』を用いて，有部論書では見られない情報を補足し，それぞれの思想の独自性を考察した．その結果，有部は法の実有性に，経量部は法の刹那滅性に，重視する各々の思想の特色を概観できたのではないか．

1）D. Anderson and H. Smith, eds., *Suttanipāta* (London: PTS, 1913), p. 41.

2）satkāyadṛṣṭi の先行研究として，中村元編『自我と無我 インド思想と仏教の根本問題』（平楽寺書店，1970 年），今西順吉「我と無我」『印度哲学仏教学』第 1 号，1986 年，pp. 28–43（以下，今西［1986］），田端哲哉「説一切有部の基本命題と satkāyadṛṣṭi」『印度學佛教學研究』第 25 巻第 2 号，1977 年，pp. 190–193（以下，田端［1977］）など．

3）*AKBh*: P. Pradhan, ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu* (Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967).

4）『中論』（鳩摩羅什訳，409 年，T no. 1564）『大智度論』（同訳，405 年，T no. 1509）などは「身見」である．また，一部の論書や経典では「自身見」や「己身見」という，もう一つの議論である，“svakāya” からの訳語もみられ，混乱している．

5）漢文資料，大正蔵毘曇部 28 本のうち，玄奘訳は 13 本であり，そのうち 12 本から「有身見」という訳語が使用されている．また玄奘以前の旧訳 12 本では「身見」であり，「有身見」という訳語は見当たらない．このことから，玄奘が「身見」では不十分と考え sat に「有」という語義解釈を付け加えたのではないかと思われる．

6）田端［1977］p. 192 上段．

〈キーワード〉 satkāyadṛṣṭi，身見，有身見

（花園大学大学院）

NII-Electronic Library Service